

戦争を知らない世代へ 19 徳島編

# 桎梏に耐えた日々

— 徳島空襲の記録 他 —

創価学会青年部反戦出版委員会

第三文明社

戦争を知らない世代へ ①9 徳島編

桎梏に耐えた日々  
—徳島空襲の記録他—

創価学会青年部反戦出版委員会

第三文明社

戦争を知らない世代へ⑨

桎梏に耐えた日々——徳島空襲の記録他

---

昭和51年 7 月 4 日      初版第 1 刷発行

編者◎ 創価学会青年部反戦出版委員会

発行者 栗生一郎

発行所 株式会社 第三文明社

郵便番号 101 東京都千代田区猿樂町2-5-4

振替 東京5—117823 電話 03(294)8731(代)

印刷所 凸版印刷株式会社

製本所 星共社

---

落丁・乱丁本はお取り換え致します      0036—7019—4438

## 発刊の辞

私たち徳島県青年部では、昨年八月十日に終戦三十周年を記念して青年平和集会を開催しました。次の日本を担う私たち青年が、真の平和運動を進めなければ、一触即発ともいえる現代世界の危機を回避できないとの強い信念で、盛大に行いました。席上では、徳島空襲の罹災者が、自らの体験を発表してください、参加した「戦争を知らない子供たち」はおおいに感銘を受けました。と同時に、「二度と戦争を起してはならない」、「真実の平和社会を築こう」との決意に、改めて燃えたのでした。

集会では、参加者全員の総意により四項目にわたる決議案が採択されました。その一つとして、私たちは「戦争体験を語り継ぐ運動を粘り強く展開していく」と決議。まずはじめに、来年すなわち本年の七月四日、徳島空襲記念の日までに戦争体験集を発刊することを決議しました。

以来、徳島県青年平和委員会のメンバーがこの発刊作業にあたってきたのです。同委員会は、九人全員「戦争を知らない世代」で構成されており、昨年の七月四日に発足。この日はちょうど三十年前に徳島市がB29の空襲によって焼野が原と化した日にあたっており、この日を徳島県民

にとつて「平和原点の日」とすべく、スタートしたのです。

そして一年足らず、さまざまな方のご協力を戴きながら、今日、このように発刊の運びとなつたわけです。

なお、本文中に入っているイラストは、体験者の方がご自身で、もっとも印象に残っている場面を描きました。あるいは、その時のようすをお聞きしながら、取材者が作成致しました。つたない絵かもしれませんが、あえて入れさせていただきました。

充分とは申しませんが、この一書に込めた、私たち「戦争を知らない世代」の平和を希求する叫びを、おくみ取り戴ければと思います。またこの一書が、平和波動の布石となり、平和運動の波が大きくなうねりとなっていくための起爆剤となることを願ってやみません。

昭和五十一年七月四日

創価学会青年部  
徳島県青年部長 藤中孝行

目

次

発刊の辞

第一章 空から炎が降ってきた（徳島空襲罹災者の記録）

|                     |       |    |
|---------------------|-------|----|
| 直撃弾を受けて息子が……………     | 江口ハルノ | 10 |
| 祖父を焼く煙にただぼう然……………   | 松本 仁恵 | 15 |
| 母を亡くした父の悲しみ……………    | 井川 茅子 | 21 |
| 防空壕に家族全員生き埋め……………   | 土屋 艶子 | 26 |
| 雲一つない夜空に満月が……………    | 船越 義幸 | 30 |
| 「置いて行って」と祖母が泣き…………… | 野村嘉寿子 | 34 |
| 見知らぬ声に追い立てられて……………  | 原 一雄  | 37 |
| 赤紫の不気味な空……………       | 島田ハルエ | 41 |
| 「水を……」との声が今も耳に…………… | 井上 好子 | 45 |
| 影を踏むように焼夷弾が落下……………  | 山沢智恵子 | 48 |
| うずくまる母の手を引いて……………   | 松本 明子 | 52 |
| 夢中でほおばった玄米飯……………    | 斎藤千賀子 | 55 |
| 鏡があめのように溶けて……………    | 川瀬カナエ | 58 |
| 灰色のペールがはがれた時……………   | 田中 鉄蔵 | 61 |
| 廃墟の街に焼け残ったビルが……………  | 天野 旭  | 64 |

第二章 望郷の思いに支えられ（引揚げ者の記録）

|                     |       |     |
|---------------------|-------|-----|
| 神国だから負けるはずがない……………  | 前田アキ子 | 68  |
| 夫の手首が短くなって……………     | 中野 英美 | 72  |
| 崩れた防空壕から手が……………     | 馬瀬 太平 | 76  |
| 「よう燃えてる」と川の中で……………  | 高田 幸代 | 80  |
| 焼夷弾が雨のようにザアザアと…………… | 谷 春恵  | 83  |
| 背筋が寒くなるあの火の雨……………   | 中村ユキエ | 87  |
| 生きて帰ったのは長男一人……………   | 道下つる子 | 92  |
| 我が子を異国の山に埋めて……………   | 亀井遊亀子 | 96  |
| 一カ月の短命だった我が子……………   | 武田ナツ子 | 100 |
| 蚊の鳴くように消えた命……………    | 桑城すみ子 | 104 |
| 戦争が憎い！……………         | 西野スミコ | 108 |
| 布団をかぶって押入れに……………    | 漕野 教次 | 112 |
| 崩壊の日は突然に……………       | 喜多 和子 | 116 |
| 帰国の果てに二児の死……………     | 郡 信雄  | 120 |
| ビストルをつきつけられて……………   | 原田アサ子 | 124 |
| 心にしみた「リンゴの歌」……………   | 川原 行雄 | 128 |



満州の野に妻子を残して……………柿谷 只一

### 第三章 孤立無援の彷徨の果てへ出征兵士の記録

月明りのなかに立つ人影は……………堀川 鯨男

千四百人がたったの四十八人に……………松村 喜平

自爆の音に身を切られる思い……………広島 忠次

毒キノコで三十時間の死の旅……………和西 義隆

クリークを死体がうずめて……………河野 正市

アラカン山脈をさまよい歩く……………野村 正勝

遺体を背負って本部へ走る……………三橋 匡熹

敵の号外ピラで敗戦を納得……………重本 輝雄

青春時代を国家に捧げて……………小倉 秀典

少しの油断が三十人の戦死に……………富永 強

海中で泳ぐ友を残したまま……………後藤 敬夫

目の前で全船沈没の憂き目……………井内 喜市

死の海となった広島で……………林 芳夫

愛機と波間に消えた戦友……………中川 政治

三たび生死の境を越えて……………吉田 弘治

あとがき

桎梏に耐えた日々



## 第一章

# 空から炎が降ってきた

〈徳島空襲罹災者の記録〉

## 直撃弾をうけて息子が……



江口 ハルノ（68歳）

当時・栄町2丁目

三十一年も前のことですが、今も忘れることはできません。思い出しては、また新たな涙にくれています。

それは昭和二十年六月二十二日、午前九時のことでした。空襲警報が鳴った直後、敵機は十機、二十機と徳島上空を北へ、東へと飛んで行きました。それまではB29が飛んで来ても爆撃されるということもなかったのですが、その時も、敵機が空に残した飛行機雲を見ては、近所の人と「きれいだなあ」などと言っていました。数分後に思いもよらない恐ろしい出来事が待ちうけていようとは夢にも知らずに……。

ちょうどその日は小学校が休みだったので、私も仕事を休み、家の中の整理をすることにしました。身のまわりの品や二、三日分の食糧を救急袋にいったあと、ひと息いれて休んでいた時でした。その時戸外で、だれかが「空襲だあーっ！」と大声で叫ぶのが聞こえました。その声が終るか終わらないかのうちに、またしても一機、敵機が飛来しました。

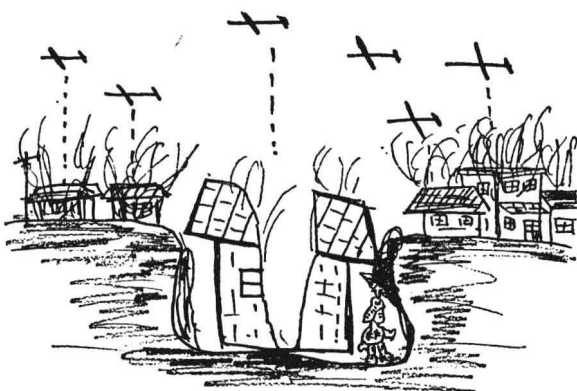
私の家の六軒西に天理教の大きな教会があり、その中に私たち町内の人が避難する防空壕がありました。近所の息子の友だちが、「宏君、飛行機が飛んで来たよ。早く見に行こうよ」と息子呼びに来ました。すぐさま「オーッ」とこたえて、息子は飛び出して行きました。

宏が出掛けた直後、ザーッ、ドカーン、ドカーン、とものすごい音と地響きがありました。と思う間もなく、土煙で目の前が真っ暗になり、我が家全体がすっぽりと土の中に落ち込み、気がついた時には、赤土の中にひざまで埋まっていました。あとで聞いたところによると、秋田町、栄町、鷹匠町へと一トン爆弾が三発落とされたのだということでした。

「宏が大変だ！」と思ったのですが、体が動きません。その時、主人は富田小学校で身体検査を受けていましたが、飛んで帰り、大急ぎで私を掘り出してくれました。すっぽりと家が陥没した状態で、地上に這い上がるのに大変な思いをしました。宏のいないのに気がついた主人が、「宏はどこだ？」と聞きますので、「防空壕へ行ったはずですよ」とは答えたものの心配でたまりません。

土煙がおさまリ、少しは視界がよくなったので息子を捜しに、防空壕へと走りました。すると入り口の大きな門は跡形もありません。教会の中では、人が右往左往しています。聞くと直撃弾を受けたとのことでした。「もしや我が子が、いや、いるはずがない」と、不吉な思いをうち消しながら、収容所となっていた八幡神社、瑞巖寺、それに富田小学校と訪ね歩きましたが見つかり

たのだそうです。そこで、老人四人、主婦一人、そして七歳の我が子・宏を含めて子供三人の計八人が亡くなったのです。



ません。どうか無事でいてくれるように、どこかに生きていてくれ、と願いながら友だちや親せきの家を回りましたが、どこにもいません。

歩くうち、行きかう人の話から、栄町の防空壕で何人も死んだ。子供も何人も死んだと聞き、あわててまた天理教会の中の壕にとって返しました。そこでは何人もの人が、我が子の名をよび、母の名を呼びながら瓦礫のなかを掘りかえています。そのなかに宏を呼びに来た友だちの家族もいるではありませんか。私たちの姿を見つけた近所の人が駆け寄って、「江口さん、宏君が、宏君が……」と泣きじゃくりながら教えてくれました。

まさか、宏が……。とても信じられません。でも周囲の人の話によると、一トン爆弾が防空壕を直撃し

呆然自失、氣もそぞろです。しかし主人に励まされ、皆と一緒に死体を探しました。ハエのとまっているところをかきわけると肉片が出てきます。ちょうど古綿をちぎったようでした。出てきたのは、子供の足二本と髪の毛がついた頭の骨だけでした。それを割りばしではさみ、折り箱に入れ、みんなで分けてそれぞれ棺に入れました。

富田浜にあった東本願寺の、死体収容所に集められた死体は百三十七体でした。が、満足なのは一人もおりませんでした。手がない人や足のない人、はては頭が吹き飛ばされている人やお腹の裂けた人ばかりでした。私の子供も、足に着物を着せてやり、埋葬しました。戦時中でしたので合同葬とはいえ、ほんの名ばかりでした。

悲しみがまだ消えない七月三日、またもや空襲です。夜十一時ごろ、警戒警報が解除になり、入っていた防空壕を出て我が家に帰り、着のみ着のままで寝ていました。そうした四日の午前三時ごろ、突如、ザザー、バリバリバリという音です。びっくりして目がさめて外へ出て見ると佐古方面が真っ赤です。再び防空壕に入りましたが、多くの人が詰めかけたため息苦しくなつて外に出ました。

B 29は、照明弾を落として真昼のように明るくしたあと、何度も何度も舞い下りては焼夷弾を落としていきます。まるで花火でも見ているようでした。我が家の近くにも焼夷弾が落ちてきたので、子供の遺骨と食糧とを肩に掛け、夏布団を頭からかぶって炎の中を走りました。焼夷弾を



避けつつ秋田町から富田橋通りへ、そして明神社の土手まで来て振りかえってみれば、我が家も市内も真っ赤に焼けていました。あとで聞いたのですが、防空壕に残った人は、皆、焼け死んだということです。